

第四回 防災ラジオドラマコンテスト 脚本

《今、私たちに出来る事。》

MA 「平成24年8月14日未明。豪雨が京都府南部地域を襲った。雨水は濁流となり、水かさの増えた川は決壊し、低地では、建物が水に浸かった。山地では、あちこちで土砂災害が起きて、各地で交通規制が続いた。そして、一か月の月日が流れる。市役所で働く父、専業主婦の母、高校生の兄と中学生の妹、そして少し足の弱いおばあちゃん。これは、そんな9人家族のお話し。
防災ラジオドラマ 《今、私たちに出来る事。》」

(ドアを開ける音)

浩介 「ただいまー。」

家族(浩介以外) 「お帰りなさい。」

浩介 「ようやく一段落ついたよ。お前たち、何か変わった事はあったか？」

涼太 「んー……？あ、俺さー、初めてボランティアに行ってきたんだ。」

涼太 「……こんなに、酷いんだな。」

洋平 「……な。それに、なんか、臭わないか？……お。なんかやってる。」

涼太 「そういや、ボランティア募集してるってツイッターで見た気がする。」

……なあ、洋平、俺たちもやろうぜ？」

洋平 「え？やだよ。」

涼太 「なんか、ご褒美くれるかもよ。」

洋平 「え？やっぱやる。すみませーん！！」

涼太 「お、俺たちも手伝っていいですか？」

監督 「……お前ら、半袖半ズボンに、おまけにサンダルやないか！！あんなあ、

ここでは泥かきだしたり、重たい家具運んだり、一歩間違えたら怪我するような事やっとなねん。そんな格好で来られたって、怪我されたりしたら、こっちが

迷惑なんや。邪魔や帰れ。」

洋平 「……なんだよ、あのおっさんえらそうに！！帰ろうぜ、涼太。」

涼太 「……なあ、洋平。俺たちが間違ってたんじゃないかねえのかな。」

洋平 「はあ？人の好意も受け取れねえのに、何がボランティア募集だよ。」

涼太 「…俺、着替えてくるわ。このまま帰るのは嫌だ。手伝いたい。」

(走り去る音)

浩介 「…それで、着替えて手伝いに行ったのか。」

涼太 「うん。また怒られるかなって思ったけど、そのおっちゃんにさ」

監督 『わざわざ着替えてまで来てくれたんやな。助かるわ。ありがとう。』

涼太 「……って言われて。すげー嬉しかった。」

浩介 「そうか。母さんはどうだ？」

清美 「おばあちゃんと、社会福祉協議会へ行ってきたわ。前に、お世話になった

ケアマネージャーの皆川さんがいるから、ちよっと相談に…」

皆川 「あらっ、川本さん！ご無事でしたか？」

清美 「うちは高台ですので、無事でしたが…」

初江 「施設が水に浸かってしまいましたねえ…」

皆川 「んー……こんな時に申し訳ないんですけど、手伝ってください川本さん…」

清美 「え?!でも、わたしボランティアとか、そんな経験無いですし。」

皆川 「大丈夫です…ボランティアの皆さんにお水を配っていただくだけで結構ですので。

初江さんも、よかったらボランティアさんのお話し相手になってあげてもらえませんか？」

初江 『「苦勞様です」って言うだけなのにねえ、みんな嬉しそう

な顔で『ありがとう』って言うてくれるんだよ。」

清美 「現地に出てる人の方が大変な思いをしてきたのにね。今までは現地に出る事がボランティアだと思っていたけれど、こういうお手伝いの仕方もあるのね。」

初江 「でもね、もしもっと大きな災害が来たら、私は足も悪いし、みんながいなかったら、逃げられないんじゃないかねえ…？」

浩介 「うーん…近所の人と仲良くすることも、大切な事だと思う。町内会とかね。そしたら何かあった時に気軽に助け合えると思うんだ。

些細な事だけどね。」

(チャイムの音)

清美 「あら、誰かしら。はーい。」

涼太 「瑞穂は遊んでばかりだったよなー。」

瑞穂 「え?あ、うん。だって暇なんだもんー」

清美 「瑞穂ー!!!お友達よー。」
家族(清美以外) 「友達?」

(足音)

奈美恵 「瀧上と申します。実は、瑞穂さんが、以前うちのキリエを助けて下さって。

改めてお礼にまいりました。」

キリエ 「みずほちゃん、こないだはありがとうー」

清美 「どういう事です?」

キリエ 「えっと…わたし、お店でおかあさんとはぐれて…その時に……」

NA

「妹の瑞穂は、被害状況も判明してきた頃、豪雨災害当日の事などを話題にして、友達の湊と近くのショッピングモールで雑談をしていた。そこに、一人の女の子が、おぼつかない足取りで二人に近づいてきた。」

湊 「いたっ!!」

キリエ 「きゃっ」

湊 「ちよっと、あんた…っ」

瑞穂 「ストップ、湊!!この子、白い杖持ってるよ。目が見えないんじゃない?」

湊 「…あ、本当だ。ねえ、こんなところで何やってんの?」

キリエ 「ご、ごめんなさい…おかあさんと、お買い物に来たの…そしたら……」

瑞穂 「…迷子?」

キリエ 「う…おかあさん、おかあさん……」

湊 「あ…よし、瑞穂!!プリクラ撮りに行こう!」

瑞穂 「いやいや、目の前に迷子ちゃんいるのに、ほっとけないっしょ。ねえ、名前は?」

キリエ 「……瀧上キリエ。」

奈美恵 「という訳でして。私たちは大雨の少し前に引越してきたばかりなのですが。

この子は少し目が悪く、周りあまり見えませんから…まだ、慣れない土地で災害にあって、凄く怖がって。そんな時に優しく声をかけてもらって、とても嬉しかったみたいなんです。本当に、ありがとうございました。」

初江 「…瑞穂も、いいことしてるじゃないの。」

瑞穂 「別に、大したことしてないよー。みんなみたいに、災害が起きたからー、とか、

特に考えてないし。」

浩介 「それでも、人助けだよ。」

瑞穂 「えへへ。ありがとうって、言ってもらえたねー。」

涼太 「俺、またボランティアに参加しようかなー？」

浩介 「ああ。だが、絶対行けるとは限らないぞ。その時できる状況かはわからないからな。でも、その心がけは大切にしておいて欲しい。」

ミ

「災害は、絶対に避ける事は出来ない。そんな中、自分の被害を少なくするための行動も、この家族が経験したように、誰かに手を差し伸べることも、私たちができることである。いつ訪れるかわからない災害に対して、

『今、わたしたちに出来ること』は、なんだろう？」